

平成29年(2017年)12月18日

れきみん

資料館だより

No. Ⅲ-8

相生市立歴史民俗資料館

〈資料紹介6〉相生・旧破魔呉服店看板

佐多稲子は小説『素足の娘』(1940年出版)の中で、第1次世界大戦の好景気に沸く相生の様子を随所に描いています。その一部に以下の文があります。

「…その路はやがて、浜からまっすぐ続いている広い、この町の中で賑やかな四ツ角へ出る。四ツ角の右向いは呉服屋、左手の向いは、雑貨屋、手前の両角は、廻船問屋と、八百屋である。」「浜屋呉服店という、場所にちなんだような名前のその呉服屋のすじ向かいの、つまり、この町のもの持ちらしい家の間にある、石の鳥居のある恵比須神社の角を左に曲がってゆくと、私の二階借りの魚屋へ出るのだ。」「やはり、土地の浜呉服店や、雑貨屋などが繁昌し、水月荘はもちろん造船所のお座敷みたいなもので、階下は倶楽部のような玉突き場などもできている。」「私たちはもうそのころ、魚屋の二階から、今度は、浜屋呉服店の通りを少し上の方に行った小間物屋の二階へ移っていたが、…」

小説には、たびたび「浜屋呉服店」が登場します。この呉服店のモデルになったのが、破魔呉服店(破魔屋呉服店・はまや呉服店)[相生3丁目1-4]です。



破魔呉服店に掲げられた看板(戦後間もないころ)

破魔呉服店は、相生小学校の天神山移転（1897年）後の跡地に1890年代末ごろ建築・創業されたといわれています。表の店舗は昭和初期に改修され、他にも部分的な補修がなされていますが、建物の大半は建築・創業当時のまま残されていました。

しかし、2012年に閉店、本年、諸事情により取り壊されることになり、11月に解体工事が始まりました。

当資料館では、小説『素足の娘』にも描かれている由緒ある歴史的建造物を記録や記憶として留めたいと考えていたところ、破魔泰輔氏（所有者）のご厚意により、表に掲げられた看板と生活用品等の寄贈を受けることができました。

看板については、新年から当資料館2階のベランダに展示できるよう、柴田年恒氏・山田一之氏ら（NPO法人相生いきいきネット）により補強・補修をしていただきました。

破魔泰輔氏によれば、「破魔呉服店」の文字が彫られた看板は、創業時から掲げられていたといえます。創業当初は「破魔呉服店」で、後に「破魔屋呉服店」「はまや呉服店」となったことから、この看板が古いものであることがわかります。

看板は一木づくり（松材カ）で、横幅約395cm、縦幅約94cm、厚さ約2.5cmを測る巨大なものです。文字の彫られた中央部に間隔の広い木目が見られます。下部が腐食しているものの、長期間の風雨に耐えて全体としてはよく保存されていました。裏は両側に各1本、内側に4本の約4×6cm角の角材を縦に打ち付けていました（内側の4本は看板の板材に深さ約5mmの溝を彫ってはめ込んでいる）。加えて、上部は薄い鉄板で、両側面は銅板で覆って補強していました。

右から左に「破魔呉服店」と浅く半肉状に彫られた文字も、それぞれ縦横が60cm前後の大きなもので、もとは黒く塗彩（漆カ）されていたようです。

左端には、「泊堂愿書」という文字（一文字は縦横7cm前後）と二つの刻印「川上愿」「次恭」（縦横約7cmの角印）が彫られているので、揮毫者（筆をふるった人物）がわかります。

「泊堂愿」とは、川上泊堂（1849年～1920年代）のことで、名は「愿」、字を「次恭」、号を「泊堂」と称しました。書家として、また漢学者として主に大阪で活躍しました。残念ながら、川上泊堂がどのようないきさつで揮毫したのかはわかっていません。

ご来館の際には、佐多稲子を紹介している「郷土の偉人コーナー」と合わせて、「旧破魔呉服店看板」をご覧になって古き相生に想いを馳せてみませんか。

〈参考文献・写真出典〉

佐多稲子 1955 初版『素足の娘』角川文庫 緑74（角川書店）

高畑敏光 1982 「佐多稲子—『素足の娘』と相生」『相生の文学』（相生市文学碑設立協会）

橋本一彦・松本恵司編 2009 ～収集『相生映像アーカイブ（データ版）』（NPO法人相生いきいきネット）

* 本資料について、橋本一彦氏・破魔泰輔氏から有益なご教示をいただきました。また、柴田年恒氏・山田一之氏には運搬、補修等で多大なご支援をいただきました。記して感謝申し上げます。

（中濱久喜）